
料理店ギルドへようこそ。

誰かの助手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

料理店ギルドへようこそ。

【Nコード】

N2004BA

【作者名】

誰かの助手

【あらすじ】

異世界とかさ、本当に存在していると思う？ 漫画とか小説の話なら、ただ作り話だしそりゃあると思うよ。でも、現実には？ 私の答えは、そんなものないに決まってる。だって現実にあったら、それこそ話題にでもなっただけ注目されてるはず。しかしそんな話今まで生きてきた中で1度も聞いたことない。だから、これからも今まで通り、何もないうまま普通に過ごしていけるはずだった。何故あの時あのような行動をとってしまったのか、今の自分でもわからない。でもその行動によって、普通に過ごしたいと思っていた自分

の未来を自分で変えてしまったことは、嫌でも受け入れないといけない事実だった。前回描かせて頂いていたものをもう一度書き直させて頂いてます。……1部、1部が長いいため、縦読み推奨かもしれません。今のところ、会話文少な目となっております。

0・00・プロローグ。(前書き)

時間的な問題があるため、一気に1話更新ができません。何日かに分けて1話更新が多くなると思いますが、ご了承ください。

0・00・プロローグ。

彼女は求めた。

いつも通り普通に平和に、これからも過ごしていけることを。

彼は求めた。

狭い部屋に閉じ籠ったままの普通から、抜け出すことを。

神は言った。

普通なんてもの、この世に存在していない、と。

「普通って一体なに？」

このようなことをいきなり聞かれて、ちゃんとした答えを出せる人はいるのだろうか。

もちろん私には無理だ。そもそも普通といっても、その普通という単語の内容自体が個人によって違うため、模範解答を出せなくて当たり前。

私にとっての普通は、強いて言うならば今の生活そのもの。

毎朝早くに起きて、勤め先である料理店に出向き、料理を作って接客したりして、そして夜になったら寝る。そんな感じのことの繰り返し。

別にこの生活に不満があるわけではない。むしろ満足しているといてもいいほどだ。

職種によっては自分の身を削ってまで街の外のあらゆる場所に生存している、凶暴な魔物と戦わなくてはならないという場合もあるし。それに自分の命を危険にさらしてまで、他人のため戦う意味がわからない。人間、誰でも自分の命が1番大事だし、自分にメリツトがなければ面倒事なんてやろうとも思わない。

こういう自分を中心とした考えを持った人間のことを、世間では“自己中”というらしいが、これも人間にとって普通だと私は考える。いや、これは人間に限らず、この世に生を受けているもの全てに当てはまるのではないかな。

例えとして、自分が何か得体の知れない敵に襲われそうになっているとする。敵の大きさは自分より大きく、武器は……まあ適当に鋭利な刃物、包丁とかでいいかな。とにかく攻撃されたら一溜りもないものってことで。で、敵の情報をまとめると、大きな図体とよく切れそうな包丁を持っている敵が、今にもこっちに襲いかかってきそうである。対抗して戦うにしても、自分に武器はなく、素手で対抗するわけにもいかない。逃げるにしても、敵の素早さも測定できないため、全力疾走をしても捕まるかもしれない可能性も。

そして、ここであることに気が付く。

ふと隣に目を向けてみれば、自分と同じように武器を持っていない、抵抗のしようのない見知らぬ人間がもう1人。しかもその人は腰を抜かしているため、走って逃げることは不可能な絶体絶命という状況。

ここで1つ、生き延びるための条件を加えてみる。

“どちらか1人が犠牲になれば、もう1人は確実に逃げるこ

出来、助かる”という条件を。

条件と隣にいる人の状況も考えて、そこで表れる選択肢は、考えずともこの3択に絞られる。

- 1、腰を抜かしている人を担いで、一緒に逃げる。
- 2、腰を抜かしている人を置いて（その人を犠牲にして）、1人で逃げる。
- 3、自分を犠牲に、腰を抜かしている人を助ける。

どれを選ぶかなんて、答えは見えているでしょ？

正義感とか無駄な考えは抜きとして、自分の命が大事なら3を選ぶことはまずない。赤の他人のために、自分の命を犠牲にするとか何のメリットもないしね。

次に1の選択肢。人1人を担いで逃げるということは、担がれる人の体重にもよるが、結局軽くも重くもその分逃げる速さは少なからず減速する。敵の素早さを測定出来ない以上、捕まる可能性は高い。運が悪ければ2人とも捕まっては、お終い。

となると、残るは2番。これが最も助かる確率の高い選択肢。こんな状況に陥ったら、私は迷わず2番を選ぶだろう。

理由？ そんなもの、分かりきっている。

何回も言うけど、自分の命が1番大事だから。

脳内ではもう1人の人も一緒にとか思っても、そんな考えは一瞬で消え去る。生き物なんて、命が危機的状況に晒されたら本能的に“自分だけでも助かりたい”って思うのが普通だ。それに加え、本能が恐怖心と焦りで煽られは始め、最終的には自己中心的な考えしか出来なくなる。

詰まる所、結局生き物なんて1番自分が大切なのだ。そう考えるのが普通であり、その逆の考えを実行する人がいるのなら、悪い

けど私は馬鹿なんだとしか思えない。

今もこれから、そう思っているだけのはずだったのに。

私は今まさに、自分の普通をぶっ壊すような行動をとってしまった。
ていた。

先ほどの選択肢から、今の状況に1番近いものを選ぶとしたら、
それは1番最悪なもの。

自分を犠牲に、赤の他人を助ける。

考えたくもないある単語が、頭の中を猛スピードで駆け巡ってい
く。

そう。これから私の身に待っているのは、予想せずとも“死”の
一文字だった。

1 - 01 ・ 暗雲の兆し。

今思えば、今日は朝からおかしな一日だった。

いつもなら目覚まし時計が鳴る前に起きることが出来るはずの朝。しかし今朝に限って起床を促す時計の爆音が鳴っていたことにすら気が付かないまま、案の定寝坊。勤め先である料理店のマスターが時間になっても出勤してこない私を心配してわざわざ様子を見に来てみたら、まだふかふかのベッドの上で爆睡中の私がいたと。もう本当に申し訳ない。

とりあえず急いでベッドから飛び起き、朝食はいつもながら摂っていないためスルー。出勤の準備は昨晩のうちに済ませておくのが私のやり方のため、歯ブラシを口にくわえたまま着替えを行う。寝間着を急いで剥ぎ、黒いＴシャツを一気に被る。

途中、歯ブラシに引っかかって「うごっ!？」と情けない声をあげてしまったことは、誰にも聞かれていないし大丈夫としよう。

口の中に残る鈍い痛みを我慢しながら、裾が短く薄い茶色のカーゴパンツに急いで足を通す。そして、ハンガーに吊るしてある上着を手に取った。前が開いており、裾が膝丈の長さまである長袖の白いローブに腕を通すと、胸元で軽く交差させ、その上から腰元を赤い帯で緩く縛る。この羞恥心の欠片もない着替え方に、一応女という性別を受けている私は女を捨てていると言われても過言ではない。ま、言われても気にしないけど。

とりあえず着替えは終わらせ、身だしなみ確認のために洗面所に立てかけてある鏡の前に立つ。そして右手で歯ブラシを掴むと、口を閉じて歯茎から血が出そうな勢いで高速移動させた。その間に空いている左手で、肩までの長さしかない茶色の髪を整える。

そこで嫌でも目に入るのが、前髪の生え際から一本だけ天に向けて存在感を掲げるアホ毛。どうもこれは生まれつきの癖毛のようで、何回直そうと足掻いても、直せた例がなかった。だからもう長年の

相棒と諦め、そのままにしている。だからといって、本心にはやっぱり直したいという思いが残っているせいか、アホ毛を目の当りにするたびに口からは小さくため息が漏れていた。

「9時になりました！ では、今日も毎朝恒例の属性別占い、行ってみましょう！」

はい？ 今何時と……？ え？ 9時？

アホ毛に気を取られて、寝坊したということをお忘れかけていた私の耳に流れ込んできた、ニュース番組の女性の声にはつとずる。

料理店の開店は午前9時。仕込みやホール内の清掃など事前準備があるため、スタッフはいつも開店1時間前の8時には出勤していなければならない。しかし今の時刻はテレビの時報によると9時ということ……。

「……かんっべき遅刻じゃん」

未だに加えたままであった歯ブラシを口内から引っっこ抜き、急いで口をゆすぐ。雑な磨き方のせいで、右上の八重歯付近の歯茎からちよっぴり血が滲んでいた。口内に広がっていく、苦いのか酸っぱいのかよくわからない鉄の味と例えられる味覚を、一気に飲み込むうん、不味い。

駆け足で洗面所を出た私は、占いの流れ続けているテレビのあるリビングへと急いだ。テレビの前に置いてある長方形の机の上からリモコンをひったくるように手に取り、そのまま電源ボタンへ指を伸ばす。

「属性のあなた！ 今日の運勢は絶好調！ 何をやっても、大抵のことは上手く進むと考えて良いでしょう。でも……」

私たちの住んでいるこの世界は一般的に「オリュミオン」と呼ばれ、人間一人ひとりに生まれつき属性という、まあ簡単に言えば得意不得意を現すものが身体の中に備わっているらしい。らしいという不確かな表現はあまり好きではないけど、何せ属性の備わっている場所というのが心臓の中とかどうとかで、確かめようがないから仕方ない。そんな身体の中身を調べられるような機会など、平和の中で暮らしている庶民にはなかなか来るわけがないし。

そして属性の単語が来れば、必然的に浮かぶものが魔法という生活を助けるための能力だ。その能力を持つ人間も世界中に多数いるが、書物によればあくまで個人の得意不得意の問題なので、扱える魔法に属性はほとんど関係ないとのこと。あるとすれば威力や効果にといったところか。

魔法の平均威力を1とした場合、自分の属性に合った魔法の種類なら威力が1.5倍になったり、逆に自分の属性と対となる種類の魔法だと、威力は通常の半分に下がったりする。

例えば、自分の属性を火とすると対となる属性は水。地の属性だとすれば空という感じ。とは言っても、この世界にいくつの属性があるのか私自身把握していないから、断言することは出来ない。

まあ苦手分野の属性魔法であっても、本人の努力次第ではどうにかなるようだ。

丁度自分の属性の結果が放送されているところだったが、時間がないため最後まで聞かずに電源を落とした。運勢が絶好調ということとはわかったけど、しかし占いなんて信じていないのが私。いや、でも良い運勢なら信じてやってもいいかなー、なんて都合のいい考えは頭の隅に置いておき、玄関へと走った。

一歩間違えれば壊れるんじゃないかと思うぐらい、思いっきり玄関の艶のある木で出来た扉を開く。扉はいつになく大きな悲鳴を上げていたが、今はそんなこと気にしている暇がない。帰ったら壊れてないか確認するから今はそのまま我慢しておいて、と心の中で呟いておいた。

室内から助走をつけて走っていたせいか、足はそう簡単には止まりそうにない。まあこのまま料理店まで止まらせる気はないけど。

しかし外に出た次の瞬間、落ち着かせるつもりはなかった足は考えとは裏腹に、ゆっくりと両足とも地に着いたままの状態になってしまった。

原因はいつもと違う外の雰囲気。なんというか、一言でいうと暗い。今はまだ朝のはずなのに、外はすでに夜になる直前のような薄暗さをしていた。

えーと……。もしかしてまだ深夜だったりする……？ いやいや、でもマスターは朝だって言いながら起こしに来てくれたし、朝には違いないだろうけど。それにしてもこれは暗すぎるというか……。てか私が今日起きれなかった原因って、まさかまだ外が暗かったせい？

周りを見てみれば、洗濯物をタライの中に入った水につけたまま、街の奥様方が心配そんな顔を浮かべながらもいつも通り井戸端会議を繰り広げていらっしやる。そこら辺を走り回っている子どもは、いつもと違う朝に興奮を隠せないようで、魔物鑑賞園によくいる、群れて騒ぐことが大得意な猿科の魔物のような甲高い声を上げて騒いでいた。って、こんな人間観察なんてしてる場合じゃない。

目的を思い出し、止まっていた足を再び全力で動かし始める。

私の働いている料理店は街の中心に位置しており、街に一件しかないからなのか、平日も休日もいつも賑わっていた。しかし、この街は人口100人以下という街というよりは村に近い状態。しかもこの街に住居がある者は、忙しくて食事の準備が出来ない家庭を除いて、普通は自宅で食事は摂る。

ではなぜ、そんなに客の出入りがいいのか。

その答えは、料理店と同店内に構えられている、ある組織が関係しているから。

「すみません！ 遅れました！」

民家に比べて少し大きい、レンガで出来た建物の扉を勢いよく開ける。開けた瞬間、嗅覚を刺激するものは、肉料理に使われている当店オリジナルのスパイスの匂いと、少々きつい酒の匂い。天井に数個吊るされた淡い黄色のランプによって、落ち着いた雰囲気が漂っている店内を見回してみれば、まだ朝だというのに酒の力によって出来上がってしまったっている人も何人かいた。

「おう、やっと起きたか。お前が寝坊たあ珍しいこともあるもんだな」

奥にある厨房と店内を唯一繋いでいるカウンターからひよっこりと顔を出して笑う、黒髪の短髪と顎髭がよく似合うおじさん。180センチはあるであろう身長に、たくましく鍛え上げられた四肢が白のコック服から姿を覗かせている。料理店に髭は不衛生だと思われがちかもしれないけど、この店のオーナーであるバジルさん本人は、全くと言っていいほど気にしていない。それにお客さんもこれといって気にしているわけでもないようで、中にはバジルさんの髭を褒める人もいた。

「本当に申し訳ないです。厨房、入ったほうがいいですかね？」

「ああ、頼むよ。何故か今日はこの時間帯から酒を注文してくる客が多くてな。料理と酒の準備を一人でやるには、結構きつかったんだ」

店内では必ず着用するようにしている、オレンジ色のバンダナで髪を包みながら、バジルさんから放たれたその言葉に寝坊してしまつたことを、また深く後悔する。嫌味を言うような人ではないといふことはわかっているのだけど、自称ガラスのハートの持ち主である私の心に、ひびが入ってしまったような感覚が。こういう日に限

ってなんで寝坊なんてしてしまったんだか……。

厨房に入る準備をしながら、こうなったのも全ては朝になっても暗いままの空のせいだ！ と、心の中で小さく八つ当たりしていたことは私だけの秘密。

昼を過ぎると、午前中から飲み続けているお客さんの大半は酔いつぶれて睡眠時間へと入る。その寝ている場所が、まだ店内のテーブルの上ならまだ良いけど、床の上となると失礼だが結構邪魔。空いた食器を片づけようとして厨房を抜けてホールへと出てみると、床のあちらこちらに人、ひと、ヒト。この光景も見慣れたもので、店のスタッフも他のお客さんも気にすることなく仕事や食事を続けていた。

そんな状況の店内で注文も少なくなってきた頃、スタッフは時間を見計らって交代で休息に入ることとなっている。

私はいつも13時から15時までの少し長めの休息を貰っているため、この時間は昼寝にあてることにしていた。

だって眠いんだもの。3度の飯より睡眠とは私のためにある言葉。その昼寝を行うためにも、この街から少し離れたところに昼間は魔物が出ることはない小さな森があるのだけど、今日も迷うことなくそこに行く予定だ。

「休息入りまーす、昼寝行つてきまーす」

「はいはい……って、ちょっと待ちなさいロゼル」

休息に入ろうと声出しをしたところ、誰かがマスターの奥さんであるアンナさんに呼び止められた。明るい茶色をした腰まである長

髪を頭のとっぺんで一結びし、その髪の手先を指でクルクルと巻きながらこちらに向かつてくるアンナさんは、いつも笑顔を決やさない女性である。現に今も両目を吊り上げて……。

あれ？ この表情は、もしかしなくても怒っていらっしやる……？

なんとなくアンナさんの背後に黒いオーラらしきものが見えたような見えなかったような気がしたため、早々とこの場を去ることに。あの人はよく怒ったり笑っていたりと忙しそうに表情を変えるけど、黒いオーラが見えるほど怒ることは滅多にない。今まで見てきた中で怒っていたときと言えば、バジルさんと喧嘩していた時ぐらい。何度呼びかけても自室から出てこようとしないため、ホルルの仕事の大半をこなしている彼女がいないときは本当に忙しかった。

しかし今回はバジルさんと喧嘩をしているわけでもないようだし、何故あそこまで怒っているのだろう。

「ローゼール、あなたまた朝ごはん食べてこなかったわね！？」

朝を抜くと一日やる気出ないっていうでしょ！」

「ロゼルってどちら様ですかー」

「あなたしかいないでしょっ！ こら、話聞きなさい！ あと今日は森に行くー！」

ちょっとめんどくさいことになりそうだったので、捕まる前にさっさと逃げることにした。心配してくれているのは嬉しいけど、今日は寝坊したから本当に食べてる暇がなかった。いやまあ、いつも食べてこないけど。

後ろを振り返ってみると、追いかけてくる様子もなかった。多分言っても無駄と理解して、すぐに店の中に戻っていったのだろう。あまりしつこくないアンナさんの性格に感謝。ありがとう。

少しでも長い昼寝時間を確保するため、駆け足のまま街の外へと飛び出す。

外は朝と変わらず、未だに暗いままだった。

1 - 02 ・ 出会いは白き、花の上で。

目の前にいる人間を見て、盛大に溜め息をつきたくなった。

食べかけである料理皿の中に顔を突っ込んだまま、ピクリとも動こうとしない1人の男。傍から見れば、料理の中に毒薬でも混ぜて毒殺したのではないかと思われるかもしれないこの状況だが、周りの人間は理由を分かっているため何も言わない。中には口元を抑えて小さく笑っている人もいるようだ。

しかしこれでは本当に生きているのかわからない。両手にはナイフとフォークをきっちり持ってはいるが、顔が見えないがために息をしているのかどうかさえ確認し難い。しかし、前のめりに丸く屈められた背中が、小さく上下に動いていることから呼吸はしていると判断する。

…… ああ、やっぱりただ寝てるだけなのか。

こんな馬鹿みたいな寝方をする人間が現実に存在していたのかと私は男をじっくりと見てみる。見ているうちに、自分の眉間にシワが寄ってきていることがわかった。

何故このようなことになってしまった？

頭の中を、渦のように繰り返しちらつくこの疑問。まあ考えずとも、原因は目の前で爆睡中のこの男だ。こいつの姿をじっと見ていたら、どこからともなく誰にも当たりやうのないイラつきのようなものが込み上げてくる。

だがこうなったのも全て、私の行動が原因なのだ。

だからいつまでも現実を受け入れないわけにもいかず、コップに淹れてあった紅茶を一口すすする。

口の中に広がる、甘味の強い果物を丸かじりした時のような甘み。砂糖もハチミツも甘味を引き出す素材は何も使っていないのだが、

ある条件を満たすことで自然と甘味が滲みでてくるこの紅茶が、私の心を落ち着けてくれる。その落ち着きの感覚もどうせ一時的なものなのだろうが、この際それでも構わなかった。

コップから口を離れた瞬間、また自然と出てしまう大きな溜め息。一息吐くと、もう一度今日あった出来事が勝手に頭の中を流れ始めている。

アンナさんのありがたいお怒りから逃げ、からっとした涼しい風が吹く秋晴れの空の下、南東に少し歩いた所にある名もない小さな森に足を踏み入れる。ラオナンと呼ばれるこの街を囲むようにそびえ立つ鉾山を越えた場所にひっそりとあるということで、人目につくことのないこの森の中を私は寝る場所を求めて歩いていた。

背の高い樹木に囲まれたこの森は、豊富な種類の果物や木の実が採れ、木の根元には毒があるのではないかと疑問を持てるほど、多種多様な色とりどりしたキノコが生えている。

いつもなら木と木の間からは太陽の光が隙間指し、枝の上では羽を休める鳥の合唱が後を絶たないはずなのだが、異常に暗い空のせいで鳥など1羽も見当たらず、お化けでも出そうなくらい不気味な雰囲気を出していた。

自分以外、生きているものがないのではないかと思わせるくらい、しんとしている森の中。風の力によって聞こえてくる木々のざわめきは、凶暴な魔物の唸り声に似ているような気もする。

なんとなく欠伸を溢しながらダラダラと歩いていると、いつも通っている小さな湖の前に来ていた。日の光がないからか緩やかな水面は見えず、一歩足を入れてしまえば抜けることの出来ない底なし沼のように見える。少し覗き込んでみると、寝不足からなのかいか

にも怠そうな表情をした私の顔が映っていた。

あー、また隈酷くなってる……。これなんとかならないかなあ。

予想以上に酷い状態になっていた自分の顔を見て、余計に暗い気分になりそうだったから急いでその場を後にした。

湖を通り抜けて少しした所で見えてくる、一面が白い小さな花で敷き詰められた花畑。ここがいつも私が昼寝場所として使っている場所だ。

普段なら風と共に心安らぐ柔らかな光を灯っている花畑であったが、今回はまるで月光の中を舞う、無数の蛍のような淡い光を放っている。

綺麗という単語では物足りない。そう、現世というなら幻想的という言葉がピッタリ合うような雰囲気の中、私は花の上に仰向けに寝転がった。そのままゆっくり目を閉じる。

この花畑の周りにだけは何故か木が生えておらず、丁度いい気候の中で日光を浴びながらの昼寝は最高に気持ちがいい。花の布団は柔らかくて、呼吸をするたびに甘過ぎない心地よい香りが私の鼻を刺激する。

「やっぱ気持ちいいな、ここー……?」

いきなり吹いてきた突風に再び瞼を持ち上げる。瞬間、視界に映った大きな物体に息をのんだ。

昼時の太陽は丁度真上に位置する。だから空が開放されている場所に仰向けに寝転がった場合、必然的に目に入ってくるだろう。現在その状態にある私の目には、ちゃんと太陽が映っていた。

球体の端だけが白く、残りの大半が黒くなっている太陽が。

反射的に横になっていた身体を飛びお越し、顔だけを大空に向ける。

朝は街の建物などで隠れてしまっていたから見えなかったけど……。暗かった本当の理由はこれだったのか。

記憶を辿る限りこれは多分、皆既日食とやらだろう。

しかし日光には、有害な紫外線などが含まれるため、直接観測すると網膜のやけどや後遺症、ひどい場合には失明を引き起こすことがあるという注意点も聞いた。なのに今絶賛直接観測中の私の目に、異常が出ているとは思えない。

ああ、今は出てないだけで後から異常が出てくるってことか。

頭の隅でそんなことを考えながらしばらくの間、珍しい光景に目を奪われる。太陽の光る部分はずでにほほ黒の闇に吞まれていたため、やがて周りを囲む線を除いて真っ黒な球体が出来上がった。

今まで生きてきた中で初めて目にした皆既日食。本で読んだことはあったけど、歴史書にもこの世界でこのようなことが起こった事例は、西暦2000年以上経った中で過去に1回しか記されていないかったはず。

じゃあ、何故今2回目が起こる？ これから何か起こるわけ？

さつきまであったはずの眠気は、いつの間にか強くなってきた風と共にどこかへ吹き飛んでいた。すでに夜中に近いぐらいまで深くなった闇が、不吉な予感を足のつま先から頭のとっぺんまで、ゆっくりと身体を浸食してくるかのように伝えてくる。雲一つ見当たらない空は、黒くなった太陽の存在感をより一層引き立てており、目を逸らすことすら許してくれないような気がした。

空を見上げ続けて、一体何分くらいが経過したのだろう。いい加減、首が痛くなってきたけど、まだなんか目を逸らしちゃいけ

ない気がする。てかこんな長い時間、黒いままなのか皆既日食って。未だに太陽はいつもの暖かな光を取り戻す様子はなく、無駄に時間だけが過ぎていく。緊張も解け、さすがにこれ以上見ていても仕方がないと思っただので、凝った首を左右に曲げてほぐそうとした時だった。

「ずいぶんと長い間、見てたな」

「ええ、まあ。逸らしたら負けのような気が……って、え？」

どこからか男性特有のテノール声が聞こえてきた。

普通に返事をしてしまったが、今考えてみるとこの花畑には私以外の人間はいなかったはず。驚きのあまり、とっさに辺りを見回してみた。右、左、前、後ろ……。

念のためにもう一度見回してみたが、しかしどこに視線を向けてみても声の持ち主の姿は見えない。え、なに。まさかの幻聴？

太陽の直接観測による影響が出てくるにも、さすがに耳にということはないだろう。とりあえず両耳を抑えて軽く手で叩いてみた。当たり前だけど、普通に軽い痛みと叩く音が伝わってくるだけで他には何も聞こえてこない。やはりただの幻聴だったようだ。きっと寝不足のせいに違いない。

何でもなかったことに安堵の溜め息が出る。安心したせいか、消えていた眠気が再び身体に襲いかかってきた。花のベッドの上にペタリと腰を着き、勢いに任せて上半身を横に寝かせる。今度こそ、ゆっくり眠れそう……。

「え？ 何、寝ちやうの？」

「ひいっ！？」

自分でも自覚できる程、すつとんきょんな声を上げてしまった。そのまま身体が氷漬けにされたかのように固まったまま動かなくなる。

いやだつてさ、普通驚くでしょ。寝転がった真横に人間の顔があったら。

「ちよ、え、な……に……」

「驚かせてごめん。オレも何でこんなことになってるかわからないんだ」

「はぁ……!？」

目の前にいたのは、無造作にはねた少し長い黒髪に、柔らかかな口調でやる気のなさそうな表情をした男だった。驚きで目を見開いたままの私の顔を見ると、申し訳なさそうに眉を下げて小さく笑っている。しかもその男の状態、明らかに普通ではない。

今の私の体勢は、花の上だが地面に仰向けで横になっている状態だ。そんな体勢の私と同じ位置に顔があるということは、同じく横になっている状態と考えるのが普通。でも違った。

男は、首から下が地面に埋まっていた。

それはもう見事に1人では抜け出すことが不可能なほど、首以外は全て地面の中に。

しかも状态的に今さつき埋まったようには見えなかった。見るからに最初から埋まっていたのではないかというぐらい、男の周りの花たちは乱れることなく堂々と咲き誇っている。……なにこれ。今

まで花と一緒に過ごしてきましたみたいな。

「あ……んた、誰？　なんで……そんなとこに埋まつてるわけ……？」

「それがわからないんだって。だからさ、助けてくれない？」

絞り出すように出た声でこうなった理由を聞いても、男自身わかっていないらしい。垂れた目尻をこれでもかというぐらいまで下げ、緩い笑顔をこちらに向けたまま助けを求めてくる。

助けろったってどうしろと？　女の私が男のアンタを腕2本で引きずり出せとでもいうわけ？　うん、無理。

脳内会議を5秒かからずして終わらせる。とりあえず引きつった顔の筋肉を無理やり元に戻し、寝転がったまま腕を首の後ろへ反らす。そして腕と足に思いっきり力を入れて身体を持ち上げると、逆四つん這い……いわゆるブリッジの状態で後ずさりを開始させた。なんとなくだけど、これ以上関わったら何かとんでもないことに巻き込まれそうな気がする。面倒事とかマジで勘弁してほしい。

人間らしくかぬ行動で手足を素早く動かしていると、先ほどまでの場所から何やら声が聞こえてきた。きつとあの男が助けを求めているのだろうけど、悪いが私にそんな善人の心などない。というよりも、私が助けるより街に戻って力自慢の男たちに助けを求めたほうが無難だろうし。

腕に入れる力をより一層強くし、両足で思い切り地面を蹴ってバネのように身体を弾ませる。そのまま勢いで身体は180度反転。地に足が着いたことを確認すると、腕を離して体勢を立て直し立ち上がった。

1回、2回と首を鳴らして調子を整えると、男のほうへ向きかえる。そして右手を小さく上げ、ニコリと作り笑い付きのお別れの挨拶

撈。

「じゃ、お元気で。機会があっても2度とお会いしないことを切に願います」

「んなこと言ってる場合じゃないって！ 前！ 前見る！」

先ほどよりはつきりと聞こえてきた怒鳴り声。せつかく私から別れの挨拶をしてやったというのに何を叫んでいるんだこの男はと、あえて口には出さなかったがとりあえず言われた通りに前を見てみ。

ちゃんと見る前に、風の音すら聞き取れないほどの早さをした何かが横から飛んできた。

あまりにいきなりすぎて啞然としてしまったが、とっさに上半身を屈ませて何者かの来襲を避ける。

間髪入れずに次の攻撃が来る可能性が十分に考えられるため、敵の姿を確認する前にバックステップで距離を取る。そして立ち上がると同時に拳を胸の前に構え、戦闘態勢をとった。

構えを崩さないまま、すぐに自分の身体に異常がないか確かめる。どうやら髪の毛数本を持って行かれただけで、特に目立った外傷は見当たらなかった。まさに危機一髪。反射神経良くて助かった……。

額から流れてきた一筋の冷や汗を拭い、敵の姿を拝む。そこにいたものは、身長163センチある私の2倍はあるであろう体長を持ち、全身に銀色の毛皮をまとった魔物。顔は狼そのもののだが、4足歩行ではなく2足歩行。口からは鋭い犬歯と思われるものが飛び出し、興奮状態に陥っているのか熊のように大きな体格と鋭く長い爪を振り回している。あれで引き裂かれたりでもしたら、一溜り

もないだろう。

魔物は数回頭を大きく振ると、大量の涎をまき散らしながらこちらに顔を向けてきた。白目を向いたままのどうみても正常ではない様子。目があっただけで身体が強張ってしまうほどの殺気を感じた。この魔物、確か以前に本で見たことがある。名は確かウルフベア―とかそのままの名前だった気が。狼と熊の配合種で、比較的に魔物の少ないこのあたりでは結構危険度の高い魔物として記録されている。ついでに言うと、運が悪いことに丁度この時期に子を産む。ということは、その子に与えるためのエサを求めて彷徨っていたところ、私たちに出くわしたということか。

もう少し行動を観察していたいところだけど、どうやらそれは許されないようだ。ウルフベア―は2足歩行から4足歩行に変え、後ろ足で地面を何度も掘り起こして威嚇を強めている。そろそろ次の攻撃が襲いかかってきそうだ。

1つ深呼吸をして、集中力を高める。

戦闘は苦手だが、これでもアンナさんから体術を教わっていたため、私も少しは腕に自信がある。

いや、ホントは自信なんてないけど、そう思っていないと速攻やられそうな気がするし。

「だあっ！」

先手必勝。やられる前にこちらから攻撃を仕掛けに入る。気合を入れるための掛け声と共に、まずは地面を蹴ってなるべく高く飛び上がった。そして右手をウルフベア―の顔面目がけて大きく振る動作を。

当然、奴はその攻撃を避けようと身体を横へ移動させた。

その隙を見、右手を引っ込めて空中で身体を半回転させ、右足の

踵を振り下ろす。空中からの落下による勢いもプラスされ、結構な威力が付いたと思われる蹴りを、巨体にしては反射神経がよろしいウルフベアーはたくましい左腕一本で防いできた。

足と腕がぶつかりあった瞬間、私の右足に痺れのがんが駆け巡る。やはり腕の見た目からしても相手の骨のほろが太いためか、押しに負けてしまったようだった。その後、着地準備に入ろうと左足を前に突出し、奴の腕を踏み台替わりにして後ろへ宙返り。音も立てずに着地を済ませて前方を確認してみると、すぐ真上に銀色に輝く何かが見えたような気がした。

頭がその何かを認識する前に、身体が宙を舞う。何が起こったのかわからない。

口から呻き声が漏れる前に地面に叩きつけられた。2、3回大きくバウンドを繰り返して横向きに落ち着いたが、下が花畑だったおかげで普通の地面に比べれば衝撃は幾分か抑えられたようである。それでもダメージは大きかった。状況からして横から思い切り殴られたみたいだ。

腹部に襲いかかってくる急激な痛みから、肺が締め付けられるような感覚に陥っていて呼吸が思うようにできない。口からは「ヒュー……ヒュー……」と襖から隙風が流れる音にでも似ている、情けない音が漏れていた。

酸素が体中に行き渡らないせいで、ちゃんと機能しない上半身を無理やり起こす。かすむ眼球で辛うじて見えたものは、ウルフベアーの視線が私ではなく地面に埋もれた男に移っていたということ。きつと自由に動き回れてしかも抵抗してくる私は捕まえにくいだろうし、逆に首から上以外が地面に埋もれているアイツのほろが、抵抗しようにも出来ないことから仕留めるには楽と考えたからだろう。まあ私がウルフベアーの立場だったとしてもそう考えるね。

一歩一歩、勝利を分かりきった表情を隠しながら静かに近づいて

くるウルフベアーに、男は自分が狙われていることに気付いたように顔が青ざめていた。口を大きく開けている様子を見ると、叫び声を上げようとしたが、恐怖から喉が渴ききって声すら出てくれないというところか。

周りの状況を確認しながら、やっと少し酸素を取り入れることが出来るようになった身体に鞭を打って立ち上がる。

このまま1人逃げるのも大いに有りだろう。敵の興味は上手いことあの男のほうに行ってくれたようだし、助かるには絶好のチャンス。唯一戦える状態にある私の力で敵わないとわかった以上、2人が助かるなどという道は閉ざされたも同然。こうなったら2人が奴の餌食になるより、私1人でも生き延びたほうがマシだ。なに、あんな名も知らない赤の他人のために、自分から危険な目に合いに行く必要なんてサラサラないし。なんといっても自分の命のほうが大事。

脳ではそう思っていた。なのに、身体は考えに逆らってか動こうとしない。森の出口へと続く方向へ足を動かそうと意識を集中させても、まるでセメントで固められてしまったかのように動いてくれない。動いて。ねえ、なんで動かないのさ!?

「た、た、たた助けしてくれええ!!頼むからああ!!」

悲痛にも似た叫び声が耳に入ってきた瞬間、固まっていた足が突然動くようになった。その足は逃げるという意思に反して、真っ先に男とウルフベアーが対峙している花畑の中心に向かって駆けていく。

男に狙いを定めていたウルフベアーは、自分に向かって駆けてくる私に再度標的を移した。このまま突っ込めばやられることは目に見えているが、こうなったらもう覚悟を決めるしかない!

胸の隣で無意識に振られている右手を止める。すぐに薬指と小指を掌の内側へ折り、残りの指3本を真っ直ぐ伸ばすと、指の先を忙しく動く両足へ向けた。

魔法名のみ……無詠唱での魔法は、本来に比べて効果が落ちるためにあまり使いたくはなかったが、今はそんなこと言っている場合ではない。一か八かの賭けに私以外、誰にも聞こえないくらい小さな声で一言呟く。

「……スペルト」

4文字の短い言葉を放った瞬間、中指の先から溢れる緑の細かい無数の結晶。妖精のように辺りを漂う結晶は、音もなく向けられた両脚に吸い込まれていく。

今回使うことにした魔法の効果は筋力増幅。簡単に言えば、攻撃力を上げるための補助魔法だ。本来の魔法の効果なら2から3倍に攻撃力が上がるはずだが、今回は1.5から運よくあつて2倍の効果。だが、少しでも上がればウルフベアーに対抗出来る可能性も出てくる……かもしれない。生き延びるためにも、その可能性に賭けるしかなかった。

未だに指先から零れ続ける結晶たち。ウルフベアーの姿はすでに目の前まで来ていた。私の手から放たれている緑色の結晶から何かを感じ取ったらしく、口を閉じたまま爪で地面を削り、低い声で唸り続けていた。

警戒心を強めたウルフベアーに向けて、強化された踵を先ほどと同じように叩きつけるため、もう一度高く飛び上がる。止められるものなら止めてみるっての！

視界に捉えた奴の顔面に向けて、攻撃準備のために身体を捻る。真下に見えた、蹴りを防ごうと身体の前に交差された奴の剛腕。そ

して結晶を全て吸収し終え、効果が発揮されつつある自分の両脚。その2つがぶつかり合う手前、私の脚は緑の大きな輝きを灯し、そして……消えた。

普通、補助魔法の効果が発揮されている場合、色は使う人によって異なるが効果が継続されている限り、輝きを灯る。その輝きが今ないということは、魔法はかかっていないということ……。。

魔法の効果が得られないまま、勢いよく振り落される踵。当然攻撃力が増したわけでもなく、最初の攻撃の時と何も変わらない場面が繰り返されようとする。まさかの状況に焦った私を見て、ウルフベアーは交差させていた腕を一気に解き、私に踏み台とされる前に掴みかかってきた。

不安定な空中でバランスを取ることも出来ず、いきなり右腕を掴まれ、抵抗出来ないまま地面へと押し付けられる。

その際、奴の鋭い爪が腕に食い込んだらしく、激しい痛みに襲われた。痛みから逃れようと反射的に腕を動かす。だが、その行動が裏目に出て、奴の爪は抜ける所かさらに奥にまで突き立てられてしまった。今まで感じたことのない苦痛に耐えながらも、まだ少しは冷静でいられたものの、横目に見えてしまった自分の腕の状況に頭の中が白と化す。

爪は、私の右腕を見事に貫通していた。
程なくして、爪は容赦無く腕から引っこ抜かれる。

「あああああああああ！？」

喉がどうにかなってしまつのではないかというくらい、大きな叫び声が口から飛び出した。自身の鮮血で染まる右腕を必死に振り回しながら、ウルフベアーを上から退けようとする。

でも、どんなに足掻き暴れても、私より大きな敵をどかすにはあ

まりにも力が足りな過ぎた。加え、怪我とショックによって朦朧としてくる意識。そのせいで精一杯腕に力を入れても全く意味がない、絶体絶命の状況ときた。やばい、やばいやばい。どうしよう、死ぬしぬシヌ……！ 死にたくないっ……！

“死”という名の恐怖が身体の底から一気に襲いかかってきた。身体は震えあがり、かすんでいる瞳には涙が溜まり、余計に視界を悪くする。あ……そっか。さっき狙われていた男も、私が見捨てて逃げようと考えていた時、こんな感じだったのかな……。

こんな状況下でも、死にたくないと考える脳の隅で意味のないことを考えてしまう私の頭は、もう救いようがない気がする。

ウルフベアーは、私の血がべつとりと付いた長い爪を真上に掲げた。きつと上から心臓部分にでも突き立てるつもりだろう。奴と爪から滴り落ちてくる血が黒に包まれた太陽と重なり、闇の中を生きる死神にも見えた。

自分の命の灯がまさに消えようとしている今、感覚が失われてきているのかゆっくりと時間が流れていく。腕を振り下ろしてくる奴の動きが、やけにスローモーションに感じていた。

「ロゼルっ！」

遠のいていく意識の中、どこからか聞こえてくる私の名を呼ぶ声。その声の持ち主の姿を確認する前に、私の意識は闇へと堕ちた。

身体に触れる心地よい暖かな何かによって、私の意識は闇の中か

ら引き戻された。

目を少しだけ開けてみると、いつもと変わらない眩しい太陽の光が私の瞳に映し出される。その隣には木で出来た天井。どうやら私はどこかの家で横になっているようだ。今まで暗闇を見続けていたせいでもうにも輝いて見える太陽に瞼を閉じた瞬間、瞼の裏にはつきりと映った爪を掲げたままのウルフベアーの姿。

恐怖からのトラウマを植え付けられたみたいで、その原因であるウルフベアーの姿に反射的に起こしてしまった上半身であったが、鈍い音と共に額に入ってきた衝撃のせいで私はまた横になることを余儀なくされた。時間が経つにつれてじわじわとくる痛みと戦いながら、横目で衝撃の正体を見る。

そこには身体を震わせながら何故か床に伏す、アンナさんの姿があった。床に額を押し当て、必死に何かを堪えていた。まあ今の状態から考えて私の額とこんにはををしたのだからけど、さすがにそんなベタな展開は……。

「様子を見に来てみただけなのにいきなりタツクルとは……。不覚……ガクリ」

そう呟いて、わざとらしく身体を小刻みに動かし始めるアンナさん。痙攣の真似でもしているのだろうか。起きたばかりで脳が追いつかず、呆れて声も出ない私に気付き、しばらくしてからゆっくりと立ち上がった。てかガクリとか効果音を口で言う人とか初めて見たわ。

呆けた表情のまま、スカートに付いた埃をパタパタと叩き落とすアンナさんの姿をじっくりと見つめてみる。いつもは一つにまとめである長い茶髪が、今日は縛られることなく宙を自由に舞っていた。ベッドの隣に設置された窓の隙間から入ってくる少し冷たい風に揺

られて、なんとというか例えが悪いがクラゲみたい。癬っ毛がもろに当てはまっているというか。

馬鹿なことを考えていると、ふいに右腕を取られた。いつの間にかアンナさんは私の寝ていたベッドの脇に来ていて、少し強引に私の右腕を自分の前へと寄せる。その時見えた、腕の中間辺りにある大きな赤い爪痕。傷は今日あった出来事を再確認させるには十分過ぎるもので、咄嗟に腕を引き戻してしまった。そのまま探るように自分の右腕を触り、異常がないかを確かめる。どうやら誰かが治療を施してくれたようで出血は止まっていて、痛みもあの時に比べれば幾分か治まっている。しかし……この傷、治ったとしても痕は消えてくれそうにないだろうな……。

「その傷、なんとか治療術でそこまで回復させることは出来たんだけど、私は治療術専門じゃないからね。申し訳ないんだけど、ここまでが限界だったのよ……」

腕の状態に言葉を失っていた私の隣から聞こえてきた、ポツリと咳く程度の覇気のない沈んだ声。この部屋に現在いるのは私とアンナさんの2人だけだから、必然的にアンナさんの声ということになるが、普段の彼女からは想像できないほどの落ち込み様だった。細い指を持った手を私の頭にそつと置き、優しく撫でてくる。いつもなら子供扱いするなと手を払い退けていただろうけど、アンナさんがこれ程まで落ち込む原因を作ってしまったのは紛れもなく私で、申し訳なさからその手を払ってはいけない気がした。

何て言葉を発していいのかもわからず、そのまま撫でられ続けること数十秒。頭の上で動かされ続けていた手がピタリと止まり、そのまま動かなくなる。何事かと思って視線を少し上げてみれば、明後日の方向を見るアンナさんの瞳の隅に私の顔が映っていた。

「あ、そうそう。森の中であなたと一緒にいた男の子、知り合い？」
「は？ 男？ ……いたようないなかったような」

言われてみれば変な男が1人いたような気がしなくもない。確かに地面に埋まって登場という、なんともインパクトのある出会い方はあったが、何せウルフベアーの印象があまりにも強すぎて正直あの場にいた男の存在を忘れかけていた。なんとか思い出そうと記憶を辿ってみるが、やけに無造作な髪の毛とヘラヘラ笑いつぱなしの緩い表情しか浮かんでこない。というか、首から上しか見えてなかったわけだし当たり前か。

それはさておき、その男が一体どうしたというのだろう。

「その様子からして赤の他人ということはわかったわ。それでとりあえず男手何人が使ってその子を掘り起こしては見たんだけど、何回呼びかけても気絶しっぱなしで起きそうにないし、あのまま森の中に放っておくのもあれだから、ここに連れてきちゃったからね」

束の間の沈黙。うん、まあ賢明な判断とは言えますね。あのまま放っておいたら確実に魔物の餌になってるだろうし。

連れてきたといっても私と同じ部屋に寝かせてあるとは思わないが、この部屋は風景からバジルさんとアンナさん夫婦の寝室と見る確か私が寝ている薄い桜色をした毛布付きベッドがアンナさんので、その向かい側にバジルさんのベッド。

助けてもらった身で我儘を言うのは気が引けるが、さすがに男と女で同じ部屋で寝てるというは……。

恐る恐る向かい側のベッドに目を向けてみる。そこは予想に反してもぬけの殻であった。そんな私の様子を見て、アンナさんが小さく笑う。

「あの子ならもう起きてホール内で食事してるわよ。じゃ、私は店のほうに戻るけど、あなたは体調がまだ優れないようならこのまま寝てるか、起きるならホールにいらっしやい。朝も昼も食べてないみたいだし、さすがにお腹空いたでしょ？」

「ん。身体は大丈夫そうだからホールに行く。ありがと、アンナさん」

腰辺りにまでかけられていた毛布を剥ぎ、ベッドの隅へと降り立つ。床に足を着いた途端、視界が歪み、身体に鉛でも付けられたような感覚に襲われた。床に頭からダイブする前に、素早く横からアンナさんの手が伸びてきて、倒れそうになる身体を支えてくれる。まだ本調子ではない私を心配そうな表情で見つめてくる彼女に、私は苦笑を返しながら「大丈夫」という意味を込めて小さく頷いた。体勢を整えると、ホールに向かう前に天井に向かって1つ伸びを試してみた。背筋を思いっきり伸ばして、緩みきった身体に力を入れる。それだけの行為なのに、重かった身体が少し軽くなった気がした。

それでまあ腹ごしらえのためにホールに向かった所、今に至るわけだが……。

私がホールへ続く扉を開けた時には、すでに例の男は寝ていた。料理皿に顔を突っ込んだままの状態。気絶していたというのに、まだ寝たりないということなのかねえ。

観察する意味もないとわかった今、アンナさんが用意してくれたサンドウィッチと紅茶というメニューの朝食を兼ねた昼食を摂るところに。

具を包み込んでいる程良く焦げ目のついたパンの隙間から見える、綺麗な黄緑色をした数枚のレタスに少し茹で過ぎたのか粉っぽくなっってしまったている潰して細かくされたゆで卵、そして汁が垂れてきそうなほど瑞々しいトマトが小さく切られ盛り付けられていて、その上には少量のドレッシングがかけられていた。酸味の利いたドレッシングの匂いが空っぽの私の胃袋を刺激する。一口嚙り付いてみると、レタスのシャキシャキとした新鮮な音が口の中から弾き出された。

しかし……胃袋を満たすために黙々と食事を摂り続ける私と真正面にいる変な格好の男。傍から見た場合、ホントどのように捉えられる状況なのだろう。てか、さっさと起きてくれないものか。

「怪我はもう大丈夫なのか？」

「あ、うんだいじょ……ではなく、大丈夫です」

「おいおい、今は勤務中じゃないんだから敬語なんか使うことないだろう。えーと？ お前はいつもの紅茶でよかったかな」

食事を無事に終え、食後の一時を1人楽しむ私の前にバジルさんが現れた。私の頭を鷲掴み出来てしまうほどの大きさがある手に、小さな銀色のポットを持っている。丸テーブルの上に置いてあった空のカップを見て、紅茶のおかわりを注いでくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2004ba/>

料理店ギルドへようこそ。

2012年1月7日00時48分発行